

■ 3章 再編小学校の在り方検討及び視察の概要

本町において再編する小学校の望ましい学校形態や学校施設の形態、特色ある教育活動について議論・検討をする際の参考とするために、すでに小中一貫校や義務教育学校として教育実践を行っている宮城県内の先進校の視察を実施した。

1 女川町立女川小・中学校の視察について

○日 時 令和6年2月9日（金）14時30分から16時30分

○視察者 委員14名 事務局3名

(1) 視察の概要

①女川小・中学校の教育について

[小中一貫教育について]

○導入のねらい・経緯について

- ・女川町の目指す子供たちの姿及び女川町のスローガンの具現化を図るための体制づくりのため。
- ・平成25年度に小学校1校、中学校1校に再編したが、規模的にも機能的にも、小中一貫教育を導入しやすい教育環境であったことから。

○教育課程について

- ・女川町教育委員会として教育大綱を定めている。その中で、目指す子供の姿の具現化に向け、6つの基本的方向と10の重点的取組を中心に据えるとともに、10年後の取組を見据えた重点施策ロードマップを作成した。これらを受け、学校が小中一貫教育「女川プラン」を作成し教育活動に取り組んでいる。

○施設一体型小中一貫校のメリット・デメリット

【メリット】

- ・9年間を通して継続した生徒指導や学習指導を行うことができる。
- ・定例の合同職員会議を行うことで、小・中の担当者間で情報共有が図られている。
- ・避難訓練や引き渡し訓練を合同で行うことで、共助の精神が育まれた。
- ・中学生に思いやりの心、小学生にあこがれの心が育っている。
- ・中1ギャップがなくなった。

【デメリット】

- ・転入職員に対して小中連携の必要性を共有する必要がある。
- ・小・中で授業時程が違うため、活動場所や休み時間の過ごし方について配慮が必要である。

- ・小・中教員の空き時間が違うため、会議や打合せの時間の調整が必要である。
- ・バス通学の児童生徒がおり、下校時間の調整が必要である。
- ・中学校へ入学するときの緊張感があまり感じられない。

○義務教育学校との違い

- ・義務教育学校は修業年限が9年間。
- ・教育課程については、小・中の学習指導要領を準用した上で、一貫教育に必要な教育課程の特例を創設。
- ・組織としては、校長が1人で、教職員組織も1つ。教員は原則小・中免許を保有。
- ・施設については一体・分離を問わず設置可能。
- ・義務教育学校への移行については、その機運が高まったときに検討する。

○小中一貫校に対する子供たち、教員、保護者、地域の反応

【子供たち】

- ・小学生は中学生があこがれの存在、中学生は小学生への思いやりの心が育っている。
- ・中学生活へのイメージが早く持てるようになった。

【教員】

- ・小・中それぞれでどのようなことが行われているのか、指導されているかを知ることで、子供たちの指導に生かされている。
- ・小・中の組織文化、習慣の違いから調整に時間がかかったが、互いに理解し合い連携がスムーズになってきた。

【保護者】

- ・小・中が一緒になる不安はあったが、一緒になってみて不安な面は解消され、今は安心して通わせている。
- ・人工芝の校庭や防犯面のセキュリティには満足している。

【地域】

- ・「女川の子供たちは地域みんなで育てる」という思いを持っている地域住民が多く、学校に対してとても協力的である。

[学校の特色について]

○小中一貫教育「女川プラン」について

- ・中学校教員による小学校授業への乗り入れ授業の実施
- ・中学校音楽科による小学校行事での合唱指導やピアノ演奏の協力
- ・ICT機器の活用
- ・女川生活実学（防災学習、協働教育、職場体験学習など）

- ・女川向学館との連携（学習支援など）
- ・おながわ放課後楽校（放課後の居場所作り）
- ・小・中合同防災訓練の実施（下校時避難訓練、引き渡し訓練、地震津波想定避難訓練、火災避難訓練、原子力避難訓練）
- ・礼儀作法、挨拶指導「女川っ子仕草」
- ・合同集会、縦割り交流会
- ・小・中合同職員会議、小・中教科部会 など

[保護者や地域の方が学校に寄せる思い]

○「女川の子供は女川が育てる」という意識が強く、協力的であり、小中一貫校になる前から子供たちへ対する思いや期待は大きい。

- ・防災、交通安全への協力
- ・地域と協力して実施する下校時避難訓練
- ・児童生徒の登校時の安全を見守る見守り隊

[P T A活動について]

○令和3年度から「小・中学校P T A」として活動を開始している。

[アンケート調査で9割の子が町に残りたいと回答したことについて]

○「一度町を離れるが、また戻ってきたい」と回答した子供たちを含めて9割だった。「女川の子供は、女川の教師が育てる。女川みんなが育てる。」というスローガンのもと、地域と学校が一体となって子供たちを育てるといふ風土があり、その地域や学校の思いが子供たちにも伝わっているものと思う。

②学校施設の見学





東体育館(ステージあり)主に中学校



西体育館(ステージなし)主に小学校



学校の幹(中央階段)



プール(屋上)



メディアセンター(図書室)



メモリアルコーナー(カタール)



メモリアルコーナー(統合前の各校)



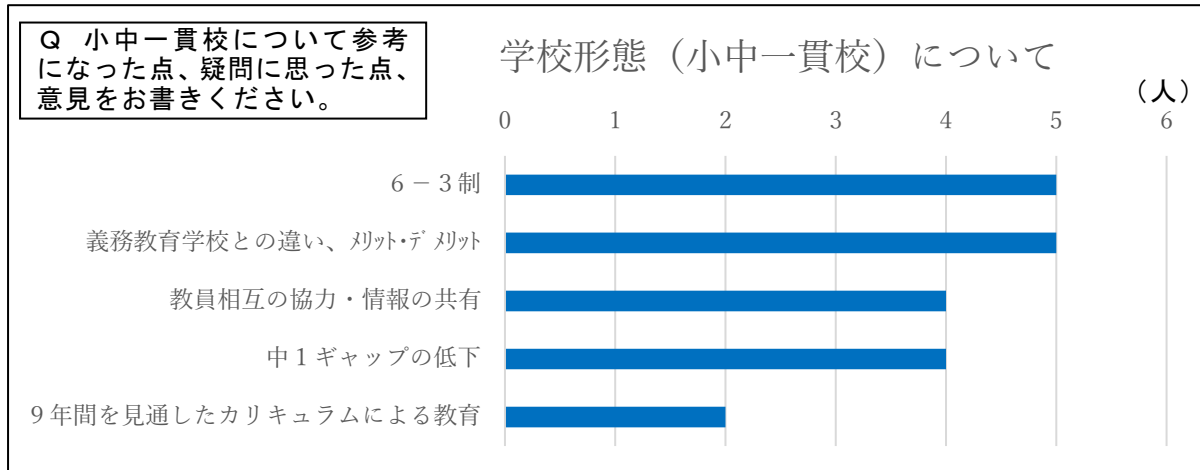
小中合同職員室

2 女川町立女川小・中学校の視察を受けてのアンケート調査結果

(1) 女川町立女川小・中学校を視察して参考になった点や意見

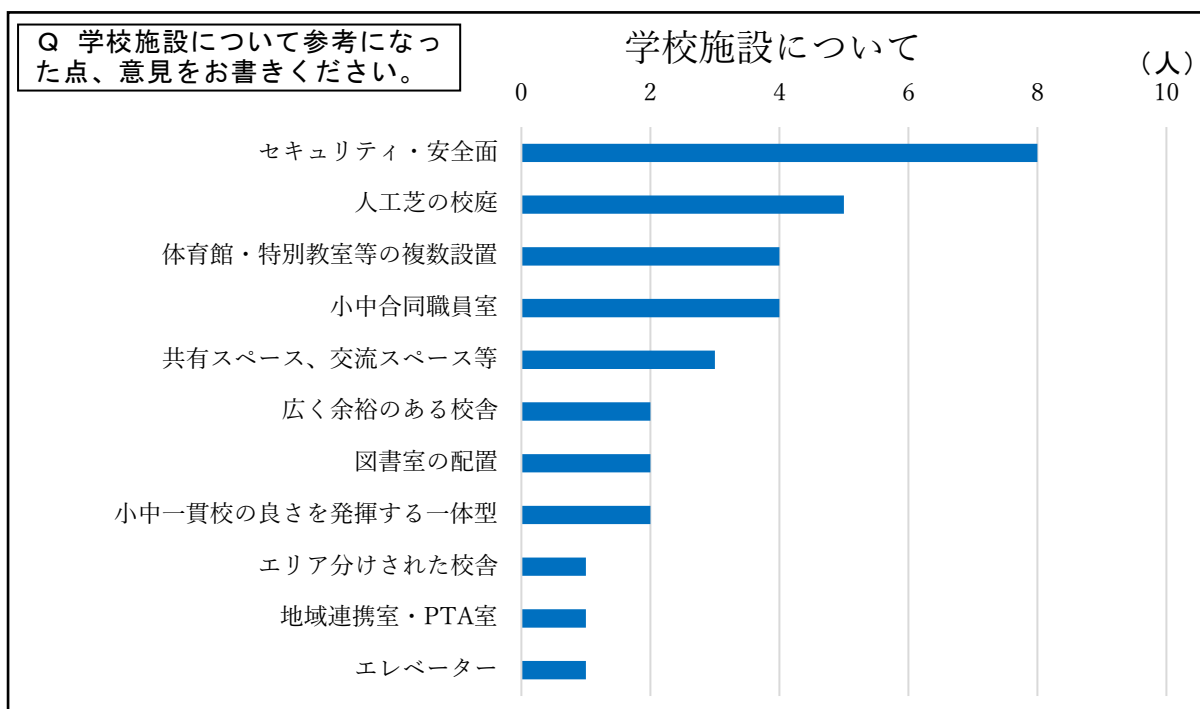
視察した委員にアンケートを実施し、参考になった点や疑問に思った点、意見等を挙げていただいた。その意見を集計したもの（人数）が下記のグラフである。

①学校形態（小中一貫校）について



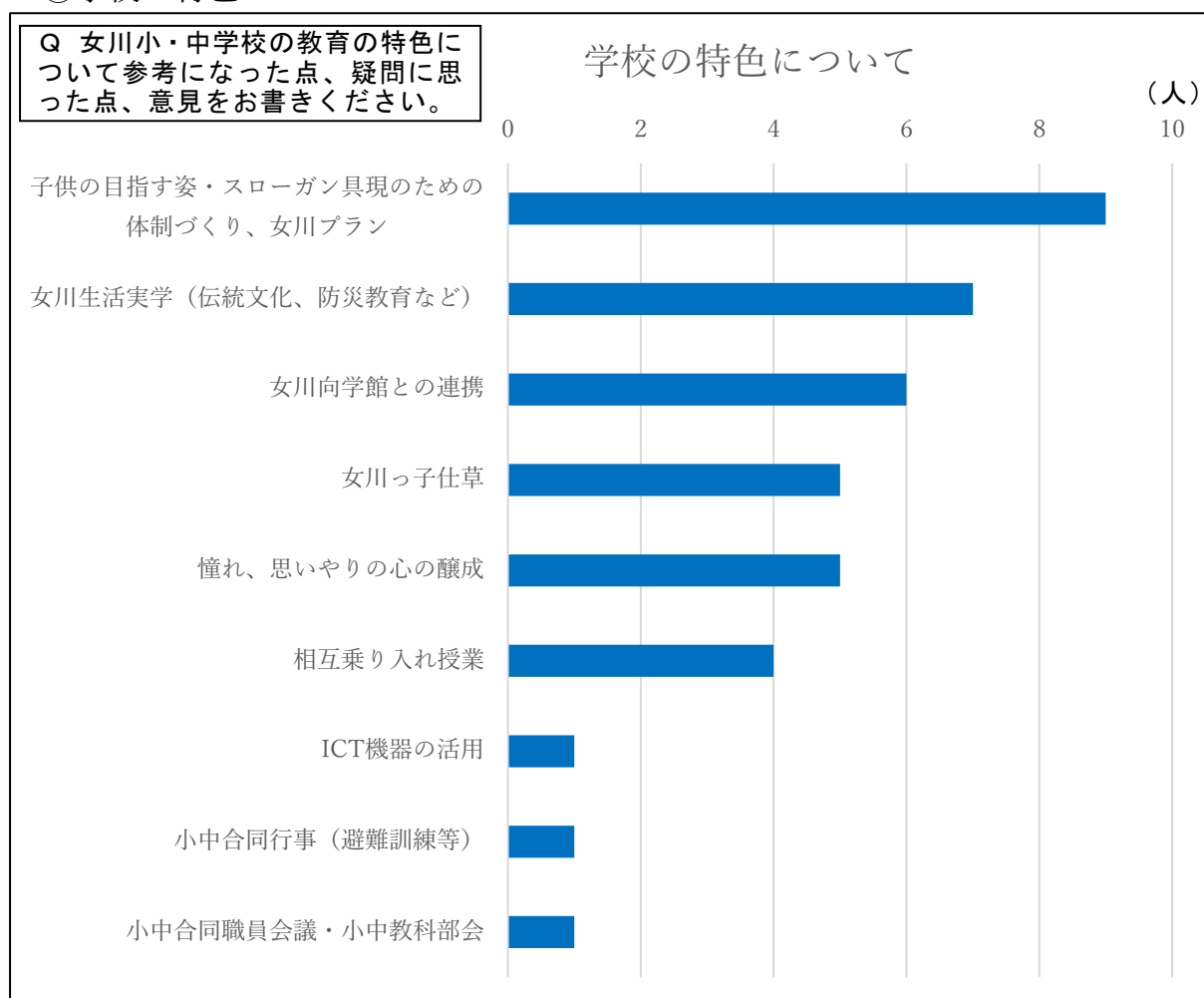
参考になった点としては、小・中学校の区切りが6-3制で現行の学習指導要領に合っていること、教員の情報共有により生徒指導や学習指導が充実した点、中1ギャップの解消・軽減につながったこと、9年間を見通したカリキュラムによる教育ができることなどが挙げられた。また、5名の方からは、小中一貫校と義務教育学校の違いやメリット・デメリットなどをもっと知りたいという意見も出された。

②学校施設について



新築の一体型校舎で、セキュリティ面が大変充実していることに対する意見が一番多かった。天候にあまり左右されることなく行事が行える人工芝の校庭も意見が多かった。一体型の校舎でも教育活動が滞ることのないよう体育館や特別教室等が複数設置されていることが次に多かった。また、職員室が小・中合同になっていることで、共有スペース、交流スペースを含め、広く余裕のある校舎のつくりに関心する意見が多かった。その他に、小中一貫校の良さを最大限に発揮できるのは一体型の校舎だという意見も寄せられた。

③学校の特色について



まず、一番多かったのは、女川の目指す子供の姿やスローガン「女川の子供は、女川の教師が育てる。女川みんなで育てる」の具現化に向け、しっかりとした体制と「女川プラン」という計画を立てて取り組んでいることである。次に、女川の独自の取り組みである「女川生活実学」「女川向学館との連携」「女川っ子仕草」などが挙げられた。また、常に小・中学生が一緒にいる環境にあることで、小学生は中学生にあこがれ、中学生は小学生への思いやりの心が育まれていることを挙げた委員も多かった。

3 令和5年度第3回在り方検討委員会での主な検討内容(令和6年3月13日)

(1) 学校形態について

- 小・中両免許の併有とあるが、両方持っている教員は少ない。乗り入れ授業で免許制が引かかる部分がある。
- 免許がなくても兼務^{森10}辞令を発令してもらい、授業をすることはできる。中学校の音楽の先生が専門性を生かし、小学校でも教えていた。
- 小中一貫校、義務教育学校の基準が12学級以上とあるが、山元は児童生徒数が減っているが大丈夫か？→地域性が加味されるので大丈夫である。
- 校長が兼務になっている理由は何か？→船頭は一人の方がいいということだと思う。
- 教育課程の特例のところに独自教科とあるが、どのようなものか？→「女川学」などの地域学や外国語や情報科などがそれにあたる。
- アンケートの結果、「義務教育学校と小中一貫校の違いがわからない」や「メリット・デメリットを知りたい」などの意見を多数いただいたので、第2回目の視察先として、小中一貫校でスタートし、その後、義務教育学校に移行した色麻学園にしたいと思う。

(2) 学校施設について

- 子供は大人を見ている。小学生のうちから、小・中合わせた多くの先生方を見せたほうが良い。小中一貫校でも義務教育学校でも子供がいろいろな大人を見る環境が良い。その意味から、一体型が理想であるが、既存の校舎に新築の校舎をくっつける形でも良いと思う。生徒も先生方も行き来できる一体型が良い。
- 財政的にも恵まれ、大変すばらしい校舎であったが、あそこまで立派なものは難しいと思うが、ぜひやってほしいのは、セキュリティ面である。一体型で対応するとセキュリティ面も強化される。
- 行きやすい学校も大切である。スクールバスの運行や駐車スペース、ロータリーの整備も必要である。児童クラブの整備も必要である。
- 小・中合同の職員室にすることで、教員の情報共有が進む。

(3) 学校の特色について

- 「女川プラン」という指針になるものがあった。山元にも「みのりプロジェクト」というプランがある。
- ふるさと山元の歴史、文化を大切にすることで郷土愛につながる。社会で臆することなくやっていけるよう情報教育を特色にしたらどうか。
- 女川向学館のようなサポートしてくれる団体があると良い。今携わっている方々の規模がもう少し大きくなりサポートしてくれると嬉しい。

4 色麻町立色麻学園の視察について

○日 時 令和6年6月27日(木) 14時00分から16時00分

○視察者 委員16名 事務局3名

(1) 視察の概要

①色麻学園の教育について

[小中一貫校から義務教育学校に移行した経緯について]

○平成26年4月1日に併設型小中一貫校として開校した。平成28年4月に法律が改正され、義務教育学校の設置が可能となった。校長が兼務している状況にあったこと、乗り入れ指導に制度上の制約があったことから、令和5年4月1日に義務教育学校に移行した。

[小中一貫校と義務教育学校との違いやメリット・デメリットについて]

○違いとしては、副校長の配置、前後3年間統合教員加配(小中^{森10}一貫校でも加配あり)があること、教員は原則小・中の両免許状を併有、兼務申請がなくとも乗り入れ授業が可能、部活動に5・6年生が参加可能などの違いがある。

○メリット・デメリットについて

【メリット】

- ・教頭が2人のほかに副校長が配置される。
- ・9年の系統性や連続性に配慮したカリキュラムの作成が容易になる。
- ・相互乗り入れ授業の制約がなくなる。また、5・6年生の一部教科担任制が実施しやすくなる。
- ・教員間の情報交換が容易になり、9年間切れ目のない生徒指導・学習指導が実施できる。
- ・ダイナミックな学年交流ができる。
- ・原則、小学校・中学校の両免許状併有教諭が配置される。
- ・中1ギャップの緩和・解消。
- ・系統性・連続性を意識した小中一貫教育の提供。
- ・異学年交流による精神的な発達。
- ・児童生徒に対する継続的な指導。

【デメリット】

- ・小学校卒業の達成感の喪失。
- ・リーダーシップや自主性を養う機会の減少。
- ・学年数・学級数の増加による施設利用頻度の減少。
- ・校務支援システムが義務教育学校に完全に対応していない。^{森11}

[色麻学園の特色について]

- 4-3-2制にしている理由や良さ、課題について
 - ・発達段階に応じて、前期部（1～4年生）、中期部（5～7年生）後期部（8～9年生）にしている。特に、中1ギャップを解消するという目的で中期部を5年生から7年生にしている。
 - ・まだ、^{森12}前期課程と後期課程の意識が強く、今後3つの期部を中心として活動を充実させたい。
- 色麻学園ならではの特色ある活動について
 - ・運動会を1～9年生までの縦割り活動として行っている。
 - ・5・6年生に理科、保体、美術の教員が入り、教科の専門性を生かした乗り入れ授業を行っている。
- 地域の関わりや連携、伝承文化の継承について
 - ・昨年度からコミュニティ・スクールを立ち上げた。
 - ・8・9年生による地域芸能（太鼓、神楽）の創造と継承を行っている。
- 1町1校であることのメリットと・デメリットと対応策について
 - ・町の教育委員会や関係機関との関係が深まり、物事がスムーズに進むメリットがある。
 - ・児童生徒の人間関係が固定化してしまい、いったん崩れた関係は修復しにくくなるデメリットがある。
- 職員会議の在り方や乗り入れ指導、部活動の教職員の連携について
 - ・職員会議は月1回、全職員で行う。
 - ・5・6年生への後期課程教員の乗り入れ授業（理科、図工、保体）。
 - ・前期課程教員の部活動指導（野球、サッカー、吹奏楽、剣道）。
- PTA 活動について
 - ・小・中学校のPTAを一つにまとめて活動。
- 保護者や地域の方々の学校に寄せる思い
 - ・安全安心で子供が楽しく通える学校。地域の誇りになる学校。

[学校施設について]

- 施設一体型を選んだ理由について
 - ・色麻中学校は耐震工事が完了しており、耐用年数が経過していないこと。また、取り壊すことになると補助金返還になること。新築する場合は健全な校舎であることから補助金が認められず、全額町の負担となることから、中学校の校舎を生かし小学校を南側に新築することとした。耐震性の違いから、小学校の校舎と中学校の校舎を完全にはつないでいないため、正式には併設型になる。

②学校施設の見学



説明を受ける委員



小・中校舎のジョイント部分



天然芝の校庭



町民にも開放されている図書室



中学校用体育館



小学校用体育館



小・中合同の職員室



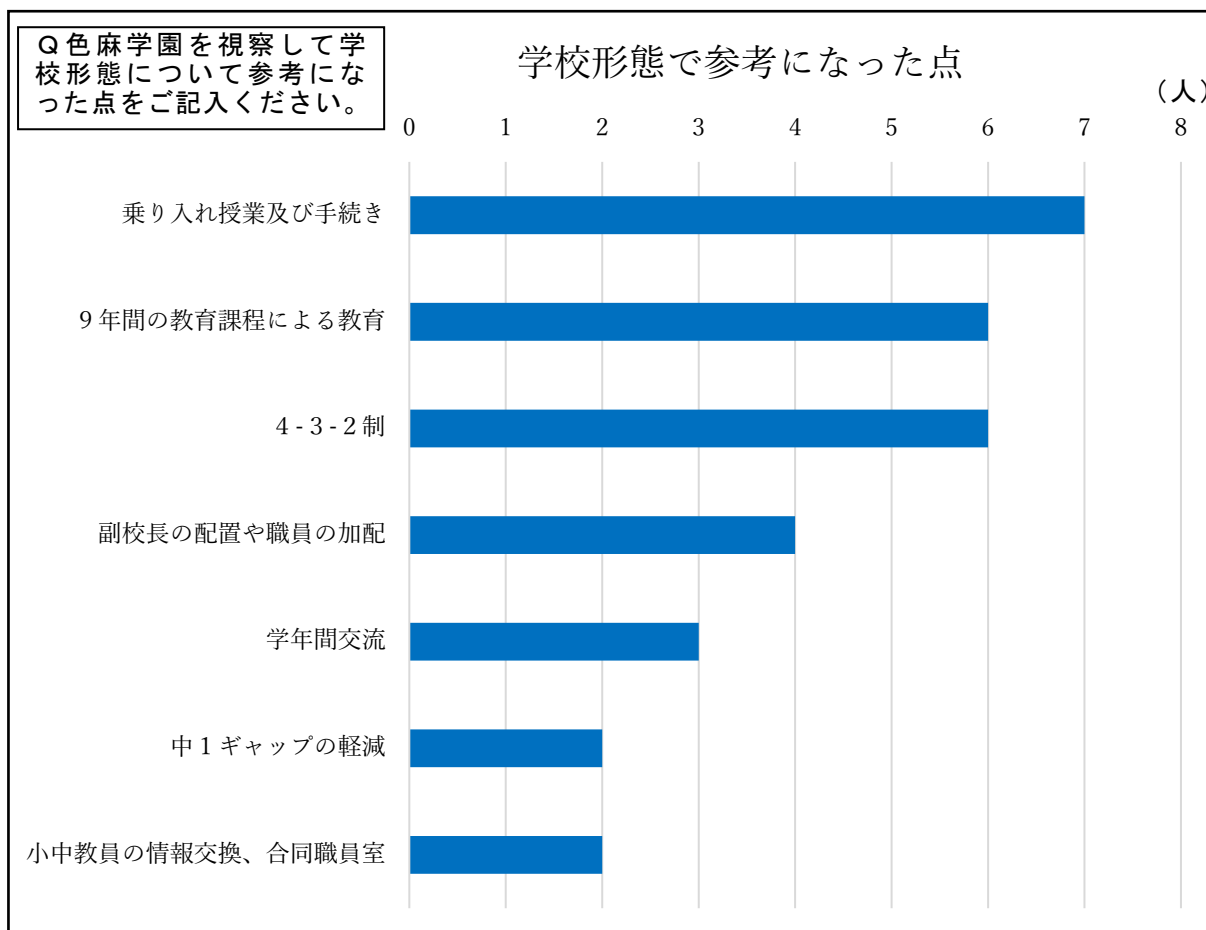
中学校用音楽室

5 色麻町立色麻学園の視察を受けてのアンケート調査結果

(1) 色麻町立色麻学園を視察して参考になった点

視察した委員に、参考になった点についてアンケートを実施した。学校形態について参考になった点として複数挙げられた意見(人数)をまとめたものが、下記のグラフである。

①学校形態について



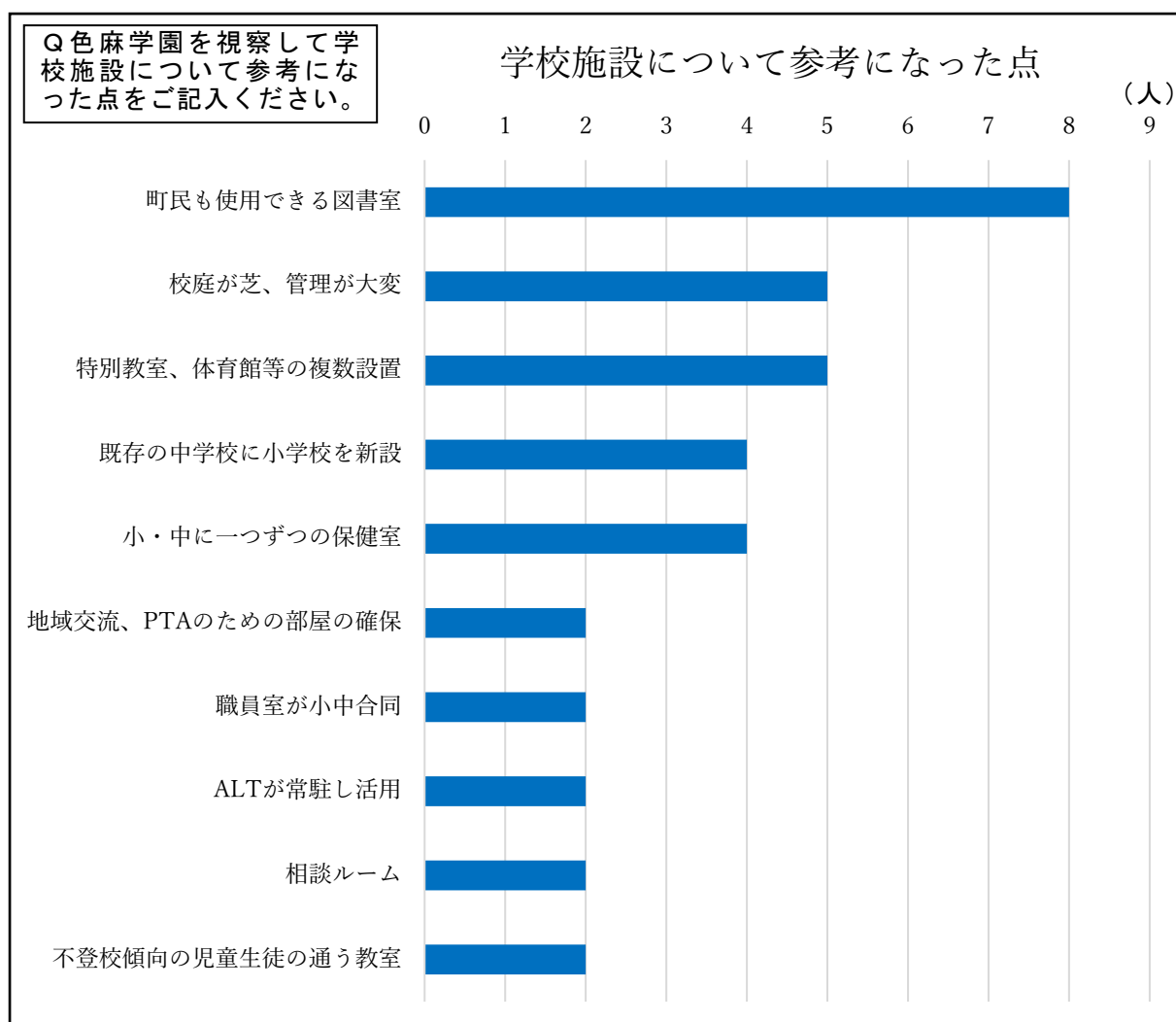
一番多かったのは、小・中相互の乗り入れ授業に関する点である。特に、義務教育学校になると申請の手続きが容易になる点を挙げた委員が7名いた。

続いて多かったのは、9年間一貫して子供を教育することの良さに触れた意見が多く、その区切りとして4-3-2制を挙げた方も6名いた。

また、義務教育学校では、副校長の配置や職員の加配がある点が良いと答えた方が4名いた。

さらに、学年間交流を挙げた方が3名、中1ギャップの軽減を挙げた方が2名、教員間の連携や合同職員室のことを挙げた方が2名となっている。

②学校施設について



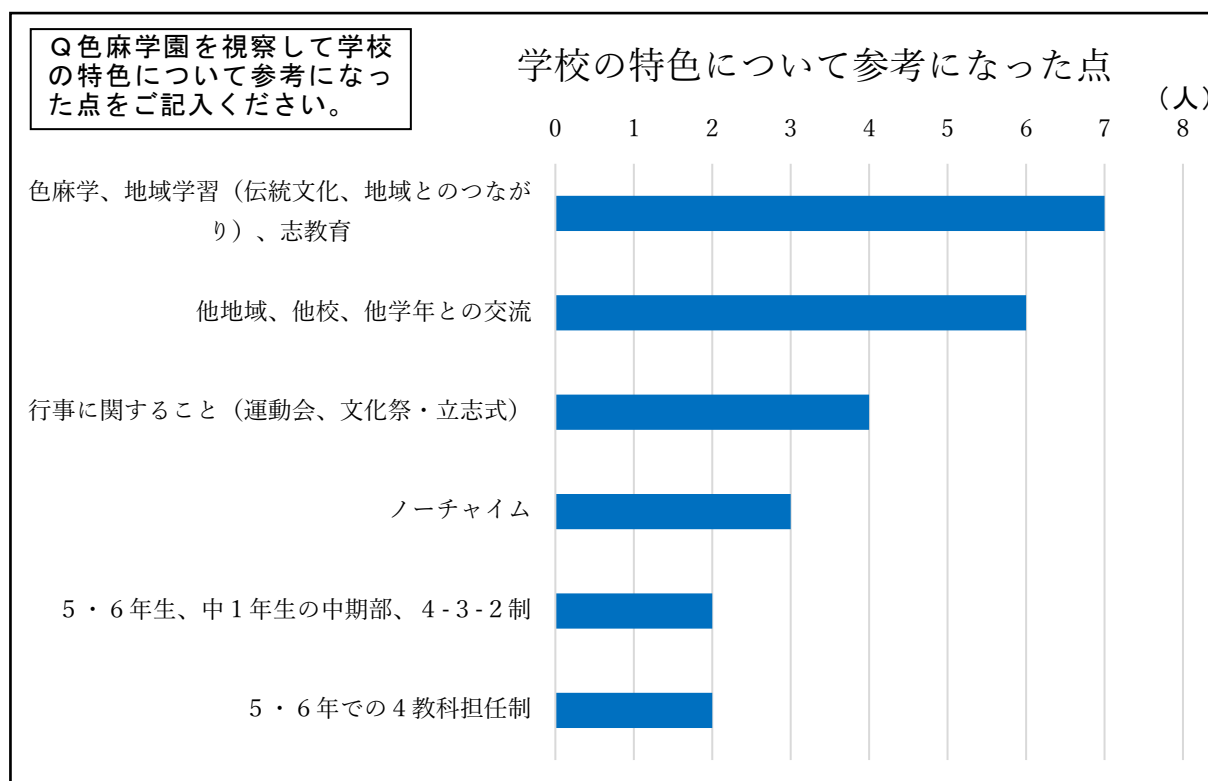
一番多かったのは、学校施設を見学しているときに紹介いただいた町民も利用できる図書室で、8名の方が挙げていた。町民のコミュニティとして開かれた学校を望んでいることが伺えた。

次に多かったのは、校庭の芝生についてであるが、この意見は、管理が大変だというマイナス面の意見である。また、小・中それぞれの教育活動を円滑に行うためには、特別教室や体育館の複数設置が必要不可欠であるという意見が5名から出された。

また、女川小・中学校は予算（建設費）50億円の素晴らしい校舎であったが、色麻学園は、既存の中学校に小学校を新設する形であった。財政面を考えたときにはこちらの方が現実的であることが4名の方から挙げられた。保健室については、特別教室の複数設置ともかかわるが、発達段階の違いから、小・中それぞれに保健室はあった方がよいという意見である。

その他には、小・中合同の職員室、ALTの常駐、相談ルームの充実、不登校傾向の児童生徒のための教室があることなどが挙げられた。

③学校の特色について



一番多かったのは、伝統文化や地域とのつながりを学習する地域学である。女川小・中学校にも「女川学」があり、色麻学園にも「色麻学」があった。これは本町に一つの学校になることから地域とのつながりを大切にしたいという委員の気持ちの表れであると思われる。

続いて、他地域、他校、他学年との交流を挙げた方が6名いた。色麻学園では、他地域として女川小・中学校、他校として加美農業高等学校と交流していた。また、4・9年生、5・7年生の交流が図られていた。

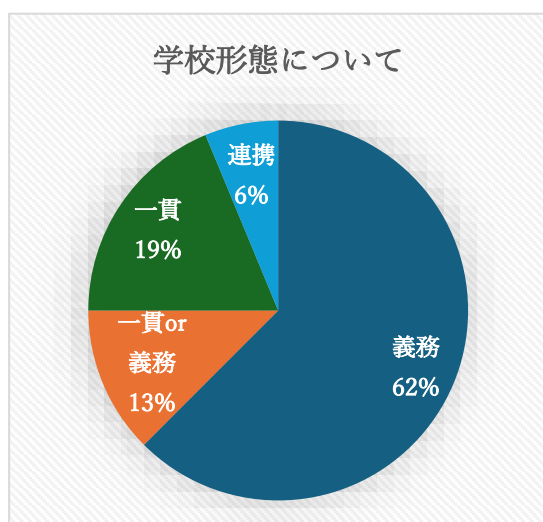
3番目としては、小・中合同行事として、運動会や学園祭（中学校の文化祭＋小学校の学習発表会）の紹介があった。1日で終わり保護者の負担が減るといった意見もあった。

さらに、ノーチャイム、4-3-2制、教科担任制などの意見もあった。

(2) 再編小学校の形態に関する現段階での意見

女川小・中学校と色麻学園の2校の視察を経て、小中一貫校や義務教育学校の違いやメリット・デメリットなど学校形態に関する事、また、施設一体型や施設併設型、施設分離型などの施設形態に関する事、そして、山元町の新しい学校にふさわしい特色に関する事などについて委員の皆さんの理解も深まったことから、現段階で委員の皆様の意見をアンケートにより確認した。その結果が次ページ以降に示したグラフである。

①学校形態について



委員の約60%以上が義務教育学校と答えている。続いて、約20%の方が小中一貫校、13%の方が一貫校か義務教育学校のいずれかと回答している。多くの委員が小中一貫教育学校がふさわしいと考えていることがわかった。小中連携を選ばれた委員は、小・中が乗り入れる小5から中1の部分が課題であるとしている。

義務教育学校と考えた主な理由

- 義務教育学校のメリットとして副校長の配置が大きいと感じた。義務教育学校のほうが、校長→副校長→教頭という指揮系統を明確にし、校長のリーダーシップを中心に、教師が一体感と共通した使命感を持って学校教育に参画できる組織を固めることができると思う。
- 乗り入れ授業に係る事務手続き（兼務申請等）がないこと。
- 中1ギャップの解消が期待できること。
- 9年間の系統性や連続性に配慮した教育カリキュラムの作成や指導を行うことが可能であること。
- 少子化が進む山元町だから、町内の子供たちが集まり、集団生活での学びが実現すること、少数だからこそ可能な小中一貫した学びができると良いと考えたから。
- 組織として1つなので、学校・家庭・地域との連携が取りやすい。また、職員が情報を共有しやすく、児童生徒の成長や発達の状況などを把握しやすい。

小中一貫校あるいは義務教育学校と考えた主な理由

- より魅力ある学校づくりを進めるのであれば、既存の形からの脱却は必要であると感じる。また、小学校を一つにするというよりも、小・中学校を一つにするという考えの方が、より地域の理解が得られると考える。
- 乗り入れ授業、児童生徒が最終目標をイメージしやすい、中1ギャップが減る、先生方が情報共有や意見交換ができるなど、小中一貫校でも義務教育学校でも同じように良さがある。

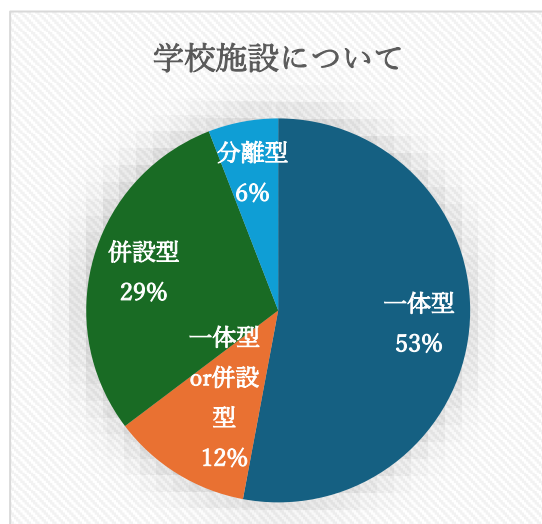
小中一貫校と考えた主な理由

- 義務教育学校にする利点が具体的につかめない。中1ギャップの解消、中学校教員の乗り入れ授業などの説明はあったが、逆に小学6年生の最高学年としての主体性や自覚をどう育むか、中学校教員の負担が増すのではないかといった不安が大きい。さらに小学校、中学校の学校文化の違いは大きいことから、早急に義務教育学校とするのではなく、小中一貫校として連携した教育活動を数年積み重ねて下地をつくり、機が熟してから再度義務教育学校への移行を考えるという方向性が現実的である。
- 中学校の現状から、この学校形態を仕上げていくためのスタッフを集めるのは難しい。
- 今までの制度（6－3制）と同じだと抵抗感を感じずに移行しやすい。

小中連携と考えた主な理由

- 4－3－2制として発達段階に応じた児童生徒の指導に当たっているが、小・中の重なりである「3」のところに、義務教育学校(小・中教員)の難しさや課題があるように思われる。しかしながら、これらは教職員の取組・心掛け次第であり、小・中児童生徒の総計人数が色麻学園程度の規模であれば、義務教育学校がふさわしいと考える。

②学校施設について



学校施設に関しては、約50%の委員が施設一体型が良いと回答している。また、併設型が約30%、一体型か併設型のどちらかと答えた方が12%と続いている。

また、これまでの視察から、小学校、中学校の円滑な教育活動のためには、体育館や校庭、特別教室等を複数設置することが望ましいことも挙げられた。

施設一体型と考えた主な理由

- 義務教育学校であれば施設一体型が望ましい。
- 職員の連携を図るには、同じ建物にするほうが良い、児童生徒も互いの様子を見ながら成長できることは良いと思う。
- 施設一体型か併設型かは、財源と既存施設を生かせるか否かで決まる。これは理想論だ

けでは現実化できないので、一体型としておきながらも併設型で実現してもよいと思う。
○同じ敷地・校舎内で9年間一緒に学校生活を送り、一貫した教育活動が展開できるから。

施設一体型あるいは施設併設型と考えた主な理由

- 小中一貫校か義務教育学校であれば、施設一体型か併設型が適当である。
- 身近にすることで、中学生へのあこがれ、下級生への思いやりを持てる。乗り入れ授業の移動等が楽。一つの集団として団結や絆が生まれる等の良さがある。

施設併設型と考えた主な理由

- 色麻学園でも工費と補助金の兼ね合いが大きな判断理由であった。小・中と併せてゼロベースで設置することは、条件・財政的に現実的ではないと思う。
- 山元中学校の建物を活用した形で併設・隣接型が妥当と考える。山元中学校にいずれ通うことを想定すると許容されると思う。
- 施設一体型にしてしまうと子供たちのそれぞれの学校文化に根差した教育活動の展開（1単位時間の違い、部活動、学校行事等）に支障が出るように思う。同一敷地内に小・中それぞれの校舎があり、小中一貫した教育、小中連携した教育が多様に展開される方向で考えたい。

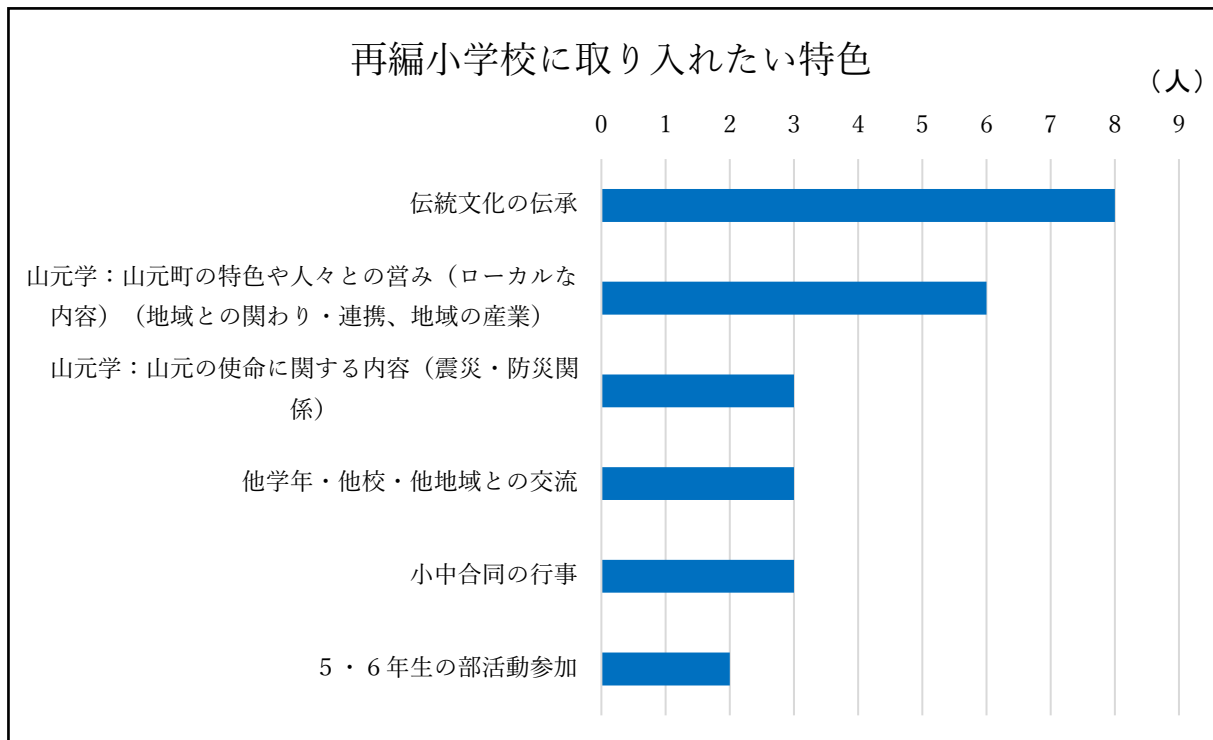
施設分離型と考えた主な理由

- 小中連携校であるのならば、施設分離型(小・中がそれぞれ別の学校であるという前提)がふさわしい。義務教育学校であるのならば、児童生徒・教職員の動線から施設一体型の方が望ましいと考える。しかしながら、学校用地・費用等で困難であるならば、施設併設型 or 隣接型になるものとする。

③学校の特色について

再編される学校の特色として取り入れたいもので一番多かったものは、伝統文化の伝承で8名の方が挙げられた。続いて地域学としての「山元学」が挙げられた。その中身としては、地域との関わりや連携、地域の産業を挙げた方が6名、震災、防災関係を挙げた方が3名である。伝承文化の8名を加え、地域とのつながりを大切にしたいと考えている方が17名と非常に多いことが分かった。

その他としては、他地域、他校、他学年との交流や小・中合同行事を挙げた方も見られた。



6 女川小・中学校、色麻学園の視察から見てきたこと

(1) 学校形態について

	女川(小中一貫校)	色麻(義務教育学校)	学校形態について見てきたこと
良 か つ た 点	<ul style="list-style-type: none"> ○小・中学校9年間を見通したカリキュラムによる教育活動 ○小・中学校の教員相互の協力関係を構築し学習・生徒指導の充実 ○中1ギャップの低下 ○6-3制とすることによる区切り、現行の学習指導要領で実施可能 ○教員間の情報共有が図られ、連携しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○相互乗り入れ授業及び兼務発令手続きが簡単 ○9年間の教育課程による教育 ○4-3-2制 ○^{※13}教職員定数の違い(副校長の配置)や職員の加配(小中一貫校でも統合加配あり) ○学年間交流 ○中1ギャップの軽減 ○職員室が合同で、小・中教員の情報交換が容易 ○行事への保護者の参加が1回で済む。 ○提出物などが少なくなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●9年間一貫した教育課程による教育が望ましいが、6-3制か4-3-2制にするかはさらに検討が必要である。 ●小中一貫校や義務教育学校にすることで、中1ギャップを軽減できる。 ●小中一貫校や義務教育学校にすることで、教員間の情報共有が図られ学習・生徒指導が充実する。 ●小中一貫校でも、義務教育学校でも相互乗り入れ授業が可能である。義務教育学校は兼務発令の手続きが必要ない。 ●小中一貫校や義務教育学校になると行事の参加など保護者の負担が軽減される。

課題等	<p>△小中一貫校から義務教育学校に転換した判断や経緯などを知りたい。</p> <p>△義務教育学校と小中一貫校のメリット・デメリットを把握したい。</p>	<p>△4-3-2制の小・中の重なりである「3」のところに、義務教育学校(小・中教員)の難しさや課題がある。</p> <p>△義務教育学校にすることで、小6の最高学年としての主体性や自覚の育成が問題、中学校教員の負担増の問題、小・中学校の学校文化の違いによる問題等が考えられる。</p>	<p>▲義務教育学校の問題として</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小5から中1の小・中の重なる部分 ・小6の主体性や自覚の育成 ・乗り入れ授業や合同行事による教員の負担増 ・小・中の学校文化の違い等が挙げられた。
-----	--	---	--

(2) 施設形態について

	女川(小中一貫校)	色麻(義務教育学校)	施設形態について見えてきたこと
良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ○小中一貫の良さを最大限にするためには隣接型より一体型が望ましい。 ○一体型により、児童生徒の交流、教職員の協働が円滑にタイムリーに進められる。 ○セキュリティがしっかりしており、安心・安全な環境であった。 ○水はけの良い人工芝の校庭のため、行事の実施に影響が少ない。 ○小・中学校の職員室が一緒であり、情報交換や共有が図りやすい。 ○体育館や特別教室など小・中それぞれの活動場所が確保されていた。 ○共有スペース、交流スペース、展示スペース(再編前の校名板や校章)などの余裕のあるつくりであった。 ○一体型でもエリアを分けることで、小・中それぞれの活動に対応できていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○小中一貫校か義務教育学校であれば、一体型か併設型が適当である。 ○一貫した教育活動を展開するためには、同じ敷地・校舎内で9年間一緒に学校生活を送ることが望ましい。一つの集団として団結や絆が生まれる等の良さがある。 ○既存の中学校の建物を活用した形で、小学校を新設する形が望ましい。 ○職員の連携を図るには、同じ建物で、小・中合同の職員室にすることが望ましい。 ○児童生徒も互いの様子を見ながら学校生活を送ることで、中学生へのあこがれ、下級生への思いやりを育てることができる。 ○同一敷地・校舎にすることで、乗り入れ授業の移動等の負担が減る。 ○特別教室、体育館、校庭、プールの複数設置が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ●小中一貫校や義務教育学校などの小中一貫教育学校を設置するのであれば一体型か併設型が適当である。 ●職員の連携を図るには、小・中合同の職員室にすることが望ましい。 ●乗り入れ授業や合同の行事を行うためにも、移動等が容易にできる一体型や併設型の環境が必要である。 ●一体型や併設型など、児童生徒が互いの様子を見合える環境にすることで中学生へのあこがれ、下級生への思いやりを育てることができる。 ●小・中とも充実した活動が行えるよう特別教室、体育館、校庭、プール等複数設置が必要である。 ●一体型や併設型になると送迎など保護者の負担軽減につながる。

		○一体型や併設型になると保護者の送迎が一度で済む。	
課題等	△素晴らしい施設で理想的な校舎になっていたが、予算の関係で難しいと思う。	△一体型か併設型かは、財源と既存施設を生かせるか否かで決まる。一体型としておきながらも併設型で実現してもよいと思う。 △一体型にしてしまうと小・中学校文化に根差した教育活動の展開（1単位時間の違い、部活動、学校行事等）に支障が出る。 同一敷地内に小・中それぞれの校舎があり、教育活動が多様に展開される方向で考えたい。	▲一体型か併設型かは、財源と既存施設の活用の可否による。 ▲一体型にすると小・中学校文化に根ざした教育活動に支障が出るおそれがある。

(3) 学校の特色について

	女川(小中一貫校)	色麻(義務教育学校)	学校の特色について見えてきたこと
良かった点	<ul style="list-style-type: none"> ○女川町の目指す子供像やスローガンの具現化に向け、小中一貫教育「女川プラン」を作成し、計画的に取り組んでいた。 ・中学校教員による乗り入れ指導 ・「女川っ子仕草」による礼儀作法、挨拶の習慣化 ・女川向学館との連携による放課後の居場所づくりや学習サポート ・それぞれの小学校の伝統文化を取り入れた志教育「女川生活実学」の実践(地域との結びつきや関わり) ○中学生へのあこがれ、小学生への思いやりという意識を持たせ、人間形成に努めていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ○総合的な学習の時間で色麻町に関する地理・歴史、風土・産業、文化等について学習する郷土学習「色麻学」に取り組んでいた。 ・郷土芸能、伝統文化の継承 ・地域の産業、地域との関わりや連携など、地域について学んでいた。 ○運動会や文化祭など小・中合同行事の開催 ○他地域、他校、他学年との交流を推進 ○ノーチャイムを実践し、時間を守る習慣化を図っていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ●山元の子供像の具現に向け、しっかりと計画をもとに取り組んでいく。 ●総合的な学習の時間を利用した「地域学」の実施 ・山元町の使命に関する内容(震災・防災関係) ・山元町の特色や人々の営みに関する内容(伝統文化の継承、地域の産業、地域の関わりや連携などローカルな内容) ・日本や世界とつながり、地域課題を追求する内容(グローバルな内容) ●小・中合同行事を推進する。 ●他地域、他校、他学年との交流を推進する。 ●礼儀作法・挨拶の習慣化を図る。

7 令和6年度第2回・第3回在り方検討委員会での主な検討内容 (第2回:令和6年7月24日、第3回:令和6年8月23日)

(1) 学校形態について

- 9年間一貫してみんなが同じ方向を向いて教育できる体制が良い。小中一貫校がいいのか、義務教育学校がいいのかは、保護者としては正直わからない。
- 義務教育学校の一番のメリットは全職員で子供たちの様子を見て、指導と支援に当たれることである。また、懸念材料は、つなぎ目の5・6・7年生の部分である。義務教育学校にして校舎も一つ、職員室も一つが良い。
- 山下小と山元中は隣にあるが、なかなか行き来ができていない。そういう意味で、物理的に一緒にいるというのが一番大きいと思うので、小中一貫校か義務教育学校にして職員室は一つにしたい。
- 建物と学校形態を一緒に考えざるを得ない。義務教育学校らしさを発揮するのであれば一体型が良い。9年間を一つとして見る義務教育学校にするか、9年間を前期と後期に分けピークを2つにする小中一貫校にするかである。
- 義務教育学校は4-3-2制、小中一貫校は6-3制と決まっているわけではない。義務教育学校でも小中一貫校でも区切りは自由にできる。
- 小中一貫校については、最初の資料では、校長が別々で、教職員組織も別であったが、宮城県では校長が小・中を兼務になっているという。宮城県ではそういう形になっているのか、市町村に任されているのか？ 校長先生から見て、どういう組織体が運営しやすいのか？ 確認できると良い。
- 保護者目線で考えたときに、小中一貫校や義務教育学校になると、記入して提出する文書が減ったり、行事が一度で済んだり、小学校の卒業式がなく、洋服を買わなくて済む。安全面からは一か所の方が良い。

[学校形態のまとめ]

◆学校の形態について、小中一貫教育学校（小中一貫校あるいは、義務教育学校のいずれか）ということで、この委員会のまとめとする。

(2) 学校施設について

- 保護者目線でいうと、一か所だと送迎が楽である。仕事をしていると時間短縮にもなる。子供たちが同じところにいれば災害の時も心強い。引き渡しの時も一か所で済む。一体型であった方が、親にとっても子にとってもよい。
- 山下小と山元中の施設を使い、間に職員室を作ればよい。そうすると体育館もプールもそのまま使える。既存の施設を十分に活用するのが良い。

- 多くの委員の皆さんから職員室か1つがいいという意見が出ている。そうすると一体型か併設型になると思う。小・中の先生方が一緒にいるというのはとても良い。山下小と山元中の敷地を使うというのが、すごくイメージしやすい。
- 職員室一つは是非実現してほしい。小・中の先生方が同じ空間で過ごすというのはとても大きいことだと感じる。
- 色麻学園のように小学校の部分を増設すると形だと財政的にも良い。
- 学校形態が小中一貫校や義務教育学校であれば、乗り入れ授業や小・中合同行事、学年間の交流などが実施されることになる。その実現のためには、容易に行き来ができ、子供同士の姿が見合える環境がふさわしいことから、施設一体型か施設併設型が望ましい。
- 施設一体型か施設併設型かは、財政面や既存施設の可否によるところが大きい。

[学校施設のまとめ]

◆学校施設について、施設一体型もしくは施設併設型ということで、この委員会のまとめとする。また、報告書には、合同職員室や、移動が容易な環境、特別教室・体育館等の複数設置などを盛り込むこととする。

(3) 学校の特色について

- 学校の特色としては、一つに絞るとかではなくアンケートの結果をもとに方向性をまとめていく方向で考えたい。
- この会議で学校の特色を決めるのは違うと思う。開校に向けて教育課程などを準備する際に検討すべきである。ここでは、その際の参考にすべき意見としてまとめていくのが良い。
- 以前勤めた義務教育学校で地域学をやっていた。1から9年生までの全校行事としては、縦割り遠足や海岸清掃などをやっていた。部活動は、5年生以上希望制だった。それに伴い、小学校の先生方も指導に当たっていた。

[学校の特色のまとめ]

◆学校の特色については、今後、設置が見込まれる準備委員会等で検討する際の参考意見として、アンケート結果をもとにまとめる。